東博通著『北の街の英語教師―浜林生之助の生涯』(開拓社)を読んで

髙井　收

かつて小樽商科大学は「北の外国語学校」と呼ばれた時代があったが、その当時の英語の教員がいかに真の英語教育を追及し、苦労していたかがこの『北の街の英語教師―浜林生之助の生涯』を読んで痛感させられた。この本は第1章から第6章まであり、「あとがき」を入れると296ページで構成されていて、浜林生之助先生の人物像と業績を紹介するとともに彼が生きた時代と係った人々が描かれている。先生が中央ではなく、北の一高校の英語教員でありながら英文学の分野で立派な業績をあげ、英語教師という職業に対していかに強い情熱を注いでいたかが読む者にとってはっきりと伝わってくる。

先生は大正9年(1920年)3月、小樽高商に赴任されているが、それ以前からの英語に対する惜しみない努力が語学教師を育て上げたと言える。広島商業師範学校では授業時間数の半分ないしはそれ以上が英語の授業という、その当時としては言語修得に大変良い環境の元で勉学に励まれている。また、小樽高商に赴任してからも、同じ時期に赴任した小林象三先生とはいつも英語で話し合うことを決め、それを約30年の間続けられたという。そもそも、同じ日本人同士が英語を使って会話することすら、普通の者にとって気まずく感じるものであると思われるが、毎日、それも、戦時中英語が敵国語として考えられていた時代に使われていたのだから驚く。外国語の修得には大変なエネルギーと時間がかかるが、根気良く何年も続けられた先生の強固な意思と努力がエピソードの中から読み取れる。

この本の中で紹介されている先生の執筆目録をみると、近代英米文学作品を中心に英文学に関する訳書、訳注書は膨大な数になり、小樽高商に赴任してから退官するまで毎月のごとく執筆していたことがわかる。注訳は英語と日本語との真の力が試されると言われ、文学作品においてはなおさらそうであるので非常に厳しい仕事であり、底知れない力量であることが伺える。先生は文学作品の注訳だけに留まらず、4冊の著書のうち英語教育に関するものが3冊もあり、英会話や英作文の講義も担当され、英文学者と語学者の両面の資質を持っていらした方である。

現在、小樽商大のシラバスを見てみると、英会話・英作文はネーティブ・スピーカーに任されているが、当時では英作文なども日本人の先生が担当していたことが分かる。また、同僚の小林象三先生はこの「オーラル・メソッド」の大家といわれていたことから、日本人教師も英語の授業では英語で教えていたようである。イギリス人のハロルド・パーマが提唱したこの「オーラル・メソッド」は口頭訓練を重視した教授法であり、「理解可能なインプットを豊富に与える」という今日的な第2言語習得仮説とも合致するところがある。当時の学生の一人である清水春雄氏は「あのころは英語の時間や英語で行われる講義が多くて、達者な遊び人は別として明け暮れ辞書を引くのに追われていた」と述べていることが記されている事からもその事は推察でき、当時の小樽高商の英語を担当する先生方がいかに真の英語教育を目指して努力されていたのかが伺える。

この本の中には浜林先生の言葉が様々な形で紹介されているが、その中の一つでは、自らの体験を基に英語を修得する難しさについて触れ、教授法や、単語を習い、構文を習って何年経っても効果が現れないもどかしさについて語り、これは英語の背景すなわち文化についての知識が必要であることを強調されている。まさしくその通りで、言葉はその国においていかに使われているかを体験または追体験にて知ることが大切である。先生も英国に2年間留学しているが、その時の旅日記である『英国まで―鹿島丸船中にて』が全文紹介されており、これを読んでも日本人として、また英文学者としての自信の程が伺える。小樽高商ではその頃毎年教員が在外研究に出かけていて留学期間も最短で2年間、長くなると足掛け6年にもなったというから外国語を教える立場の語学教師にとっては実に恵まれた時代であったことだろう。

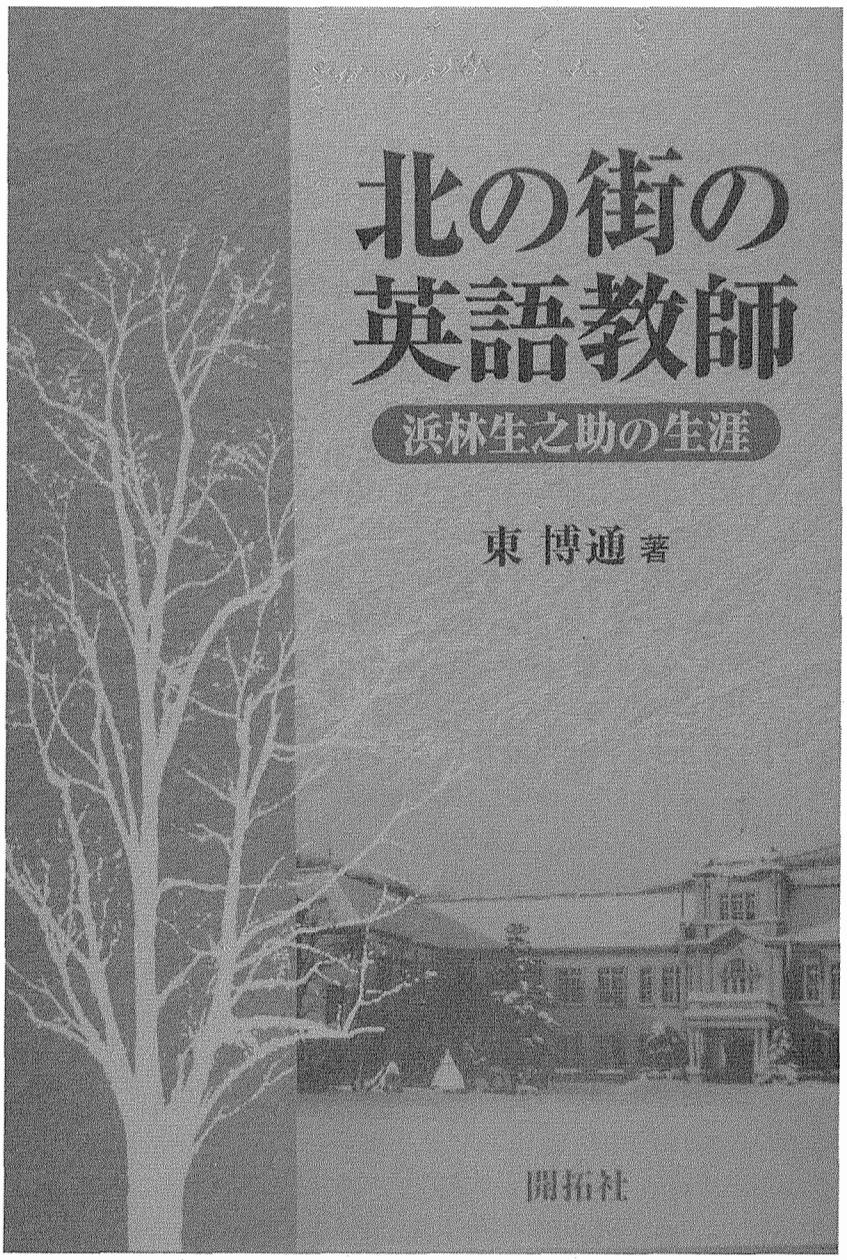
この本では先生の気質についても実に詳細に触れており、いかに思いやりのある人間性と英語の教師という職業意識を持っていたかを伝えるエピソードが紹介されている。その一つに昭和8年の東京朝日新聞の「学窓新点描」欄において、英国人から「東京からこちらでは始めて逢った本当の英語を話す人」と評価されていることが紹介されている。さらに、伊藤整氏は先生のことを「学問のほかに人生の急所を知っている人であった」と残している。

小樽高商は大正15年(1926年)に臨時教員養成所が設けられ、その当時中等学校の英語教員を養成する道内唯一の教育機関であった。これは小樽高商の語学教授陣と語学教育のレベルがいかに優れていたかが推し量れるものである。また、「北の外国語学校」と呼ばれるほどに外国語に力を入れていた時期でもあった。

浜林先生は昭和22年(1947年)60歳でお亡くなりになり学校葬がとりおこなわれた。最後に先生の人物像について伊藤整氏の回想が紹介されているが、「田舎の学校にひっそりと生きている傍流の学者で、しかもおそるべき実力を持っているという意味では典型的な人だった」という言葉は実に印象的である。

なお、著者の東博通氏は、義父から浜林先生のことを時々聞いており、先生の伝記を書くことになったという。著者もあとがきに「私が浜林生之助の伝記を書くようになったきっかけは、生之助に対する義父の一種の追憶の情に発している」と書いている。

小樽商科大学に縁あって英語の教師として勤務し早20年が過ぎたが、この本に出会い、本校の歴史の深さを改めて感じることができ、同時に英語の教員としての責任の重さをひしひしと感じさせられた。『北の街の英語教師―浜林生之助の生涯』は英語教員には必読の書であることは言うまでもないが、小樽商大の卒業生、学生諸君にも是非一読していただきたいと念じる次第である。



2007年10月刊行